中国における片上伸受容史試論

――プロレタリア文学の様式と内容を探求する人々――

陳　朝輝

一、はじめに

中国における片上伸の受容史を全面的[1]に考察した研究は殆ど見られない。私は日・中プロレタリア文学理論の相互影響関係を考える際、一九二〇～三〇年代の片上伸の文藝批評活動は非常に重要であると思う。本論では、一九二〇～三〇年代中国文壇における片上伸の受容史を辿りつつ、当時彼の文芸批評活動に関心を持っていた中国人文学者たちは彼に何を求めていたのか、またそれが中国プロレタリア文学の発展にどのような影響を与えたのか、という問題について検討したい。特に後半では片上伸と魯迅との関係について、先行研究を踏まえつつ改めて考察し直したい。

二、片上伸について

中国における片上伸の受容を検討する前に、日本文壇における片上伸の同時代評や彼自身の文藝思想・主張などを簡単に整理しておきたい。

（一）伝記

片上伸（ノブル）（一八八四～一九二八）は青年時代天弦と号し、晩年から専ら本名伸を用いた。愛媛県の出身。キリスト教徒であった母の実家、高等小学校から寄寓していた医者にして漢学者でもあった伯父の影響は強いと言われている。[2] 中学校時代から文学が好きで、特に島崎藤村と土井晩翠の作品を愛読し、手紙も送っていたという。明治三三年四月に、早稲田大学の前身である東京専門学校・哲学及英文科に入学すると、二年次から秋田雨雀・相馬御風・野尻抱影と共に文学研究会を組織したが、同会には坪内逍遥や金子筑水も加わっていたと伝えられている。明治三九年四月に早稲田大学を卒業すると、直ちに『早稲田文学』の記者・編集者となって活躍しはじめる。明治四〇年以後は、「人生観上の自然主義」（『早稲田文学』明四〇・一二）、「未解決の人生と自然主義」（『早稲田文学』明四一・二）、「生の要求と藝術」（『太陽』明四五・三）等々の名著を発表して一躍文壇の注目を集めるのである。この頃は自然主義文学を強く擁護するが、しかし大正七年第一回ロシア留学を終えて帰国すると、留学中に「十月革命」に遭遇した影響もあっただろうが、次第に階級文学に関心を寄せはじめるのである。[3] 特に大正一一年、階級移行に否定的見解を述べた有島武郎の文章「宣言一つ」を批判して以後、昭和三年三月の突然の病死まで、片上伸は確かに日本「プロレタリア運動の発達に尽瘁」[4] したと言えよう。しかし、ここで一つだけ慎重に確認しておきたい点は、片上伸はあくまでも一人のプロレタリア文学者（傍点は筆者による）であって、プロレタリア運動家（傍点は筆者による）ではなかった、ということである。例えば、片上伸は嘗て谷崎精二に、「文学部で若い講師が必要だが、今××君と△△君が顰りに運動をしている。僕としては余り運動をする人を学校へ入れたくない」[5] と述べたことがある。ここでは、彼はプロレタリア運動とは意識的に一定の距離を置いていたのではないか、とも推測される。片上伸は飽くまでもプロレタリア文学を一種の「新興文学」として見ていて、宮本顕治の表現を借りて言えば、一つの「過渡期の道標」[6] として理解していただろう。少し話がそれるが、私は魯迅が片上伸の「無産階級文学の諸問題」を「現代新興文学的諸問題」と翻訳したのは、必ずしも魯迅自身が述べている「時

勢」のみが原因ではなかった、と推測している。それは、この「現代新興文学的諸問題」という題名は、片上伸の階級文学に対する態度を適確に反映しているからだ。このことは次に検討する片上伸と日本プロレタリア文学の関係からもある程度伺える。

(二) 片上伸と日本プロレタリア文学

(1) 大宅壮一の「片上伸論」

上に紹介した自伝を見ても分かるように、片上伸の文学活動は大体、自然主義文学を擁護した前期とプロレタリア文学を弁護した後期に分けられると思う。[7] 日本文壇においては、前期の自然主義文学時代の片上伸に対する評価は一致する点が多い。しかし後期のプロレタリア文学者としての功績については、評価が分かれている。私はこれらの評価は三つの傾向に分けられると思う。第一はプロレタリア文学に批判的な見方を持つ大宅壮一・谷沢永一などに代表される傾向；第二はプロレタリア文学に熱意を持つ岡澤秀虎・津田孝らに代表される高く評価する傾向；そして第三は吉田精一に代表されるより客観的、理性的に研究する学者の傾向である。

大宅壮一は、一九二八年三月に片上伸が病死した直後、雑誌『新潮』に「片上伸論」[8]を発表して、次のように述べている。

①プロレタリア派に対しても、氏はつねに一種の〈修正派〉であった。……たいていの場合、過去と現在、旧と新、虚偽と真理とが妥協して、〈最上の知恵〉の仮面をかぶって現われるのである……場合において、アカデミックな、大学教授的な、非冒険的な〈常識〉がものをいっていることが多い。片上氏はつねに解説し、弁護し、批判したけれど、決して〈主張〉しなかった人である。

②氏は各時代の諸種の流れを観測し、分析し、解説し、批判し、排斥し、賛美し、弁護してきたけれど、決して

一度も、いずれの流れにも、身を投じなかった人である。……氏はつねに〈文壇測候所長〉の職にあった……しかしながら……ときにはその細心さがかえってわざわいして、〈一日遅れの天気予報〉のごとき観を与えたことも珍しくなかった。ことにプロレタリア文藝批評家としての氏の所論には、この方面の素養が足りなかったせいか、とくにこの傾向がはなはだしかった。

また、大宅壮一は「ぼく（大宅―陳注）らが先生（片上―陳注）にお願いしたいのは、いまずいぶんある文学の諸傾向のうちで、どれがいちばん新しいものの萌芽になるようなものであるかということを見極めていただきたいのです。……もしプロレタリア派だとすれば……さらにそれを検討して、これこそほんとうにいい萌芽であるといえるものを選り出して」ほしいと質問したところ、片上伸は「それならいままでの書いたものをよく読んでもらったら多少発見せられるはずだ」と答えたという。大宅壮一はこれに応じて片上伸のプロレタリア文学に関する著書を精読したようだが、しかし不満は解消されることなく、却っていよいよ腑に落ちなかったようだ。片上伸の上記の答えに対して、大宅は次のように述べている。

自然主義的なリアリズムと、プロレタリア文学におけるリアリズム、どの点が違っているのか。またプロレタリア文学とリアリズムとはどういう関係にあるのか。リアリズムはプロレタリア文学の一様式にすぎないのか。……それともプロレタリア文学は、必然的にリアルでなければならないのか。もしそうだとすればなぜそうなのか。実証主義的世界観から自然主義文学論が生まれたように、マルクス主義的、唯物弁証法的世界観から、文学の内容論のみならず、何らかの様式論をも導きだすことができないのか。こういう基本的な問題に対しては、氏はいまだほとんど何らの解答をも与えていないのである。

この批判に対して、吉田精一が「毒舌家の大宅の以上の評は、誇張癖を伴い勝ちで多少割り引いてきかなければならない」[9]と述べたことがある。これに私は少なからぬの同感を持つが、ここで私がより注目したいのは、片上伸が「それならいままでの書いたものをよく読んでもらったら多少発見せられるはずだ」と暗に示しているところである。

恐らく大宅壮一の批判は、主に片上伸の『文学評論』（大一五）を想定したものと思われるが、しかしこの『文学評論』とは大正一一年から大正一五年の間に書かれた論文集であって、そこに表われている片上伸の主張や見解は必ずしも成熟していたものとは言えない。吉田精一もその前半に対して、「所論はまだあいまいで、明確に階級的な認識を獲得した評論とはいいがたい」[10]と評している。しかし後半の「中間階級の文学」（大九）、「階級藝術の問題」（大一一）、「無産階級文学の諸問題」（大一四）、「類型の文学について」（昭二）、「日本プロレタリア文学の三四の作品」（昭三）などの作品については、次第に具体的になってきたと述べている。吉田氏がこの『文学評論』を、その書かれた年代順によって主旨が「変化」しつつあると見ている点に、私は同感する。少なくとも吉田精一はこの著作の論文集としての性格を充分に理解しており、同書の中に流れている四年ほどの時間の幅にきちんとした配慮を示している。

しかし全く遺憾な点がないわけでもない。例えば、吉田はせっかく「中間階級の文学」から「日本プロレタリア文学の三四の作品」へと片上伸のプロレタリア文学観が変化しつつあると指摘したのに、更に一歩進んで、その変化が何らかの方向を暗示しているのではないか、という問題までは検討しなかった。今我々が改めてこの『文学評論』及びその前後に書かれた片上伸の作品を読んでみると、片上伸は決して大宅壮一が言う「何らかの答えもしてない」わけではないようだ。少なくともその質問に答えようと模索していたことは間違いないようだ。

（2）『文学評論』の主旨

晩年の片上伸のプロレタリア文学に関する論評は、大半この『文学評論』に収集されている。この論文集で片上伸は〝三たび〟にわたって「第三階級勃興当時の文学様式」（昭二）の問題を議論していた。ここからは、些か長くなるのを

厭わずに、要点部分を以下引用しておきたい。

①プロレタリア文学運動は、その社会意識に於いて緊密でなければならぬと同時に、その藝術上のスタイルの問題においても、明確な主張に到達することを期すべきである。文藝上の問題としては、結局するところ、プロレタリア文学の様式の発見創造が最も重要な心がかりでなければならぬ。文藝の中に含まれる社会意識という意味でのイデオロギーの問題も、文藝上の運動では、その新たな文学上の様式を規定する原理としての社会意識と、それによって規定せられた新様式と、この二面の主張を含んで起きるのである。……プロレタリア文学の結局造り出すべき新様式に就いては、殆ど何等の具体的な指標が提示せられていない。……要するに、プロレタリア文学は、今日に於いては既に明らかに一つの文学上の運動となろうとしている。……しかしながら、これが文学上の運動として、明確な主張を立て得るまでには、即ち新様式の提唱の上に具体的な指標を把握するまでには、まだ幾多の準備時代を経過しなければなるまい。プロレタリア文学の創造すべき文藝上の様式がどういうものであるかに就いては、まだこれと言う頼りどころになるほどの提唱がないのである。今はそこまでに到達するための準備時代の一つである。[11]（「……」は中略を示す。以下同）

②プロレタリア文学もまたたしかに新しい暴露の文学である。自然主義文学は、プロレタリア文学のために一つの準備でもあり、地ならしでもあった。プロレタリア文学が、自然主義文学その他の前時代の文学から、全くかけ離れて生まれて来たりするものだとは勿論考えられない。一体プロレタリア文学の様式が、どういうところに落ちつくかということは、まだ確かなことは考えられていないのである。しかし、新しい階級の興って来るときには、必ずその階級の意義を表現する文学が生まれ、その文学には必ず一定のスタイル（様式）があって、その階級に特有の意識を表現するために適当な形を取るということ、而してそれは単に一般的なスタイルの上ばかりでなく、文学のジャンル（種目）の上にまで、その階級特有の意識を表現するために適当な選択が行われるということ――これ等の事実は、文学の歴史が大

よそ示しているところである。[12]

③無産階級文学に関する論争は、いろいろの方面の問題に互って行われて来たのであるが、それ等の中で実際上切実な問題として考えられているのは、形式と内容との問題である。従ってまた文学上前時代の遺産の継承の問題である。新しい生活内容が新しい形式に盛られなければならないのは勿論として、その新しい形式は何から作り出されるかの問題である。何もないところから新しい形式を作り出すことの出来ないのは勿論である。[13]

上記の引用を見ると、大宅壮一の「マルクス主義的、唯物弁証法的世界観から、文学の内容論のみならず、何らかの様式論をも導きだすことができないのか。」という質問に対して、片上伸が「それならいままでの書いたものをよく読んでもらったら多少発見せられるはずだ」と答えたのは、彼自身も模索中だったので答えられなかったためであろう。しかしまた決して大宅壮一の言う「基本的な問題に対しては、氏はいまだほとんど何らの解答をも与えていない」という指摘も的を射てはいないようだ。実はプロレタリア文学の様式と内容に関して絶えず探究していた片上伸は、晩年において、少しはそのイメージを掴みはじめていたようだ。例えば「最近ロシア文学の意義」において、まずは「ロシア文学の変遷発展は唯ロシアだけのもっている一つの筋ではなくて、日本の文学も亦同じ筋道を取りつつある……これらの状態を研究し、調べて見るということは、少なくとも我々にとって興味ある問題である。[14]」と強調した上で、次のように述べている。

①詩と云うものは藝術のうちでその成立のために最も経済的な条件を多く必要としない種類のものである。……詩歌を作ってそれを味わうと云うことのためには、作るにも一人でよいし、印作刊行の上にも比較的少しの費用で済むから、詩歌を一つの藝術として成立せしめるために必要な経済上の条件が、どの点から考えても簡単で、手軽

であるといえる。……また新たに社会的変革を行った新興の民衆が自己の力と責任との感じ、新時代創造の喜悦の感じをおのづから詩歌の上に表白するに至るということも極めて自然なことである。[15]

ここで片上伸は、詩歌は初期プロレタリア文学の様式に適している、という見解を述べていると言えよう。

②革命の初期……無産階級文学の中心の種目は抒情詩であった。それに次いで、具体的に生きた人間の生活を表現することを標榜するようになってからは、無産階級文学には小説の作品が多くあらわれるようになって来る。[16]

ここで片上伸はプロレタリア文学の発展図を描いていると言えよう。つまり、プロレタリア文学はまず抒情詩的なスタイルから始め、次第に叙事的な小説へ変遷し、様式も次第に複雑化していく、という片上伸見解である。

③革命を具体的に表現するための第一の題材となったのは、やっと通り過ぎて来たばかりの、まだ記憶に新しい内乱時代の生活である。……その日常の生活、工場に於ける乃至家庭に於ける労働者の生活を描いたものは、まだあまり多くは出ていなかった。……若い労働者プラトーシュキンの書いた『新生活』などは、その結構その他藝術上の幾多の欽陥に拘らず、労働者の生活を主題として、その新旧生活の争闘や婦人の解放のための戦いなどを取り入れている点で、ともかく一つの先駆者的な地位を与えられてもよいものだと言われている。……ロシア無産階級文学は将来この方面に於いて生面を開くであろう。[17]

ここで片上伸は、プロレタリア文学の題材と内容は現段階では現実生活の描写であるべきだ、と主張していることが

分かる。

④無産階級文学が、その将来に於いて、一層現実に切実になるためには、この「革命の道づれ」（「同伴者」という訳語が現在は一般的である――陳注）の出現は、避くべからざるものでもあれば、そのために必要な要素――リアリズムの傾向を、将来の無産階級文学のために提供するものでもあったと言い得るのである。[18]

ここで片上伸はリアリズムとプロレタリア文学の関係を説明し、その将来的な発展方向を示したと言えよう。

大変長い引用となったが、以上の発言を包括的に整理しておくと、片上伸が晩年に構想していたプロレタリア文学の様式と内容及びその創作法とは、つまり初期は叙情詩の形式を取り、次第にリアリズム的な創作法を用いて主に現実生活を描写する文学である。ここまで考えを突き詰めてきた片上伸が、大宅壮一[19]の非難に対して明白な答えを出せないまま突然病死してしまったのは、実に惜しまれる。後に彼の弟子の中の何人かがこの模索を続け、より片上理論を鮮明にしていくが、それが数年後にソヴェート文壇から勃興してくる「社会主義リアリズム」的な創作法と相応して、一九三〇年代の日本プロレタリア文壇に大きな影響を及ぼすのである。今までは「社会主義リアリズム」的な創作法と言えば、すぐソヴェート文壇の影響が指摘され、日本文壇においては、それが恰も完全に輸入されて来たもののように思われる記述が多い。[20]しかしその源流を詳細に見極めると、必ずしもそうではないような感じはする。前述のように、日本文壇内部において既にそれを育てる基盤が出来上がっていたのである。その基盤を培いあげた人々の中で、片上伸が果した役割は決して小さくはないと思われるが、十分な実証研究がなされていない。現時点では、あくまでも一つの重要な研究方向として提示しておくに止めざるを得ない。日本プロレタリア文学の発展における片上伸の探究とそれを継承した弟子達の労が、後のソヴェート文壇「社会主義リアリズム」による創作法を日本に上陸させた最大の促進作用

を担っていたとするなら、既に一九二〇年代半ばからリアリズムとプロレタリア文学の関係に注目し、その取材や内容についても明白に現実生活を描くべきだと主張していた片上伸の評論活動は、正にその先駆的な役割を果たしていたと言えよう。この辺の実証研究がこれからの私の大きい課題であると考えている。

三、中国における片上伸の受容

すでに四半世紀以上前に、芦田肇は「当初私自身が考えていたよりも日本の、あるいは日本を経由したマルクス主義文学論の中国への移入に目を見張るものがある。……ソビエトから直接移入された側面がないわけではないが、少なくとも一九二八年から一九三三年にかけては、圧倒的に日本経由である。さらに日本のプロレタリア文学運動の中での論点の推移が、時期的にややずれることがあっても、かなりパラレルに中国に反映しているという傾向も指摘できる」[21]と指摘したことがある。それならば、一九三〇年代日本プロレタリア文壇に大なる影響力を有していた片上伸の言論主張は、当時の中国でどう受け止められていたのであろうか。続いては、このような日中左翼文壇の連動関係を背景にして、文壇史的な視点から中国における片上伸の受容・影響たるものを考えてみたい。

(一) 北京旅行の謎

中華民国十一（1922年）年九月十九日の『晨報』（第七版を参照）に、以下のような一節の記事が見られる。

文藝批評家片上伸明日在北大演講

▲日本有名之文藝批評家

日本早稲田大學教授片上伸，此次應滬漢兩處日本人聘請來中國講演，於前晩抵京。北京大學校長蔡元培擬請片上氏於本月二十日（星期三）午後在北大第三院公開演講。片上氏爲日本現代有數之文藝批評家，尤精通俄國文學及俄國家近（ママ）（近代――陳注）文藝思潮，氏日演講，想必有一番新穎之言論貢獻聽者也。

また、『北京週報』にも、「来京中の早大教授片上伸は十九日大和倶楽部に於いて〈労農露国の文学〉の題下に現在露国の文学に就き一時間半に亘る詳細の講演を為し、翌廿日午後二時から北京大学系諸氏の主催で同校第三院大禮堂で〈北欧文学の原理〉の題下に周作人教授の通訳で一場の講演を為し非常の喝采を博しついて午後五時から孔徳学校に於いて生徒の為に講演し夜は北京大学有志の歓迎宴が催されて其れに臨み二十一日午前十時十五分発で離京した。」[22]と記している。次週にも、「片上氏在津講演　早大教授片上伸氏は二十二日午後南海（「南開」の誤植か――陳）にて夜は公会堂にて講演し同夜奉天に向った」[23]と報じていた。これはおそらく中国における片上伸報道の最初のものであろう。そして二日後の九月二一日に、片上伸のこの講演の日本語版が同報に掲載されていた。数日遅れて『晨報副刊』（二二年九月二五日）と『北大日刊』（二二年九月三〇日）も其々この講演稿の中国語訳を連載した。[24]

この時の片上伸の北京の旅について、後に魯迅は「氏がロシア遊学される時に北京で行われた講演」[25]と記している。しかし前出『晨報』には「此次應滬漢兩處日本人聘請來中國講演」とはっきり記しているし、また『北京週報』に掲載された日本語版講演稿の冒頭でも、片上伸自身が「今回支那に参りましたのは、上海及漢口等における講演に招かれた為めであります」[26]と明言している。また片上伸の年譜と早稲田大学一九二二年の授業の時間割表[27]を見ても、その年に片上伸が「ロシア遊学」に赴いた気配は全く見当らない。むしろ早稲田の露文科を設置したばかりの片上伸が、先頭に立って熱心に仕事に没頭している様子が伺える。その点から考えるに、この時の片上伸は短期出張で北京に行ったとしか考えられない。当日の講演会場に足を運んだ魯迅がなぜ事実と異なることを記しているのか、これは単なるの記憶違いのか、それとも片上伸本人がそう言ったのか、今後の研究課題である。また、この時の旅の目的地がそもそも北京であったとしたら、北京旅行の目的は何であったのか非常に興味深い。片上は嘗てエロシェンコからロシア語を習ったことがあり、今次も魯迅宅を訪ねているのだが、エロシェンコはすでに三ヶ月前に中国を留守にしていたのである。丸山昏迷の案内[28]で魯迅邸を訪れた片上伸がそれを知らなかったとは考えられない。また周作人も片上伸の訪問当日留守にし

ていた。こうしたことから、片上伸は魯迅に会いに北京へ行った可能性が高いとも考えられるのである。もちろん、その前日に胡適をも訪問しているので、[29] 魯迅以外の人に会いに行った可能性も否定は出来ない。[30] 残念ながら一九二二年の『魯迅日記』は失われているし、『胡適日記』もこの日の来訪を一筆も記していないので、片上伸がこの時どんな目的で中国に行き、また中国人の文学者たちとどのような関係を持ったのかという問題は、今後の研究に委ねるしかないが、しかし今回の旅が後の中国における片上伸受容のネットワーク作りに一役買ったことは間違いあるまい。数年後片上の文学理論に関心を寄せた人々は殆どがこの時期に彼を知ったと思われる。その中でも、特に周作人と片上伸の関係は注目される。

(二) 周作人と片上伸

一九一九年八月二一日の『周作人日記』には、午後銭玄同から片上伸の著書『ロシアの現実』が送られてきたと記されている。これは二人の接点を確認できる最初のものである。仮にこの書物が周作人の依頼によって送られて来たとしたら、周作人は相当早い時期から片上伸の文学活動に注目し、強い関心を持っていたと言えよう。そして一九二二年に片上伸が北京に現われた時、彼は北京大学学長蔡元培の名義で、また共通の友人であった丸山昏迷を通じて北京大学での講演を頼んだと思われる。[31] 講演当日、周作人は片上伸を旅館まで出迎え、また胡適に「蔡先生の代わりに主催者をし」て貰っていることから、彼が今回の講演を相当重視していたことが伺える。自らその講演の通訳を務めたのが彼自身の意思であっただけでなく、恐らく張鳳挙・章廷謙（川島）がその講演稿を訳して『北大日刊』『晨報副刊』に掲載したのも彼の指示によるものであっただろう。ロシア文学の専門家片上伸と北欧文学に強い関心を持っていた周作人は、多くの共通の話題を持っていたに違いない。これをきっかけに、周作人と片上伸は相当親密になったようだ。[32] 『周作人日記』に片上伸の名前が二〇回以上も登場することが、その親交ぶりを物語っている。

特に一九二四年、片上伸が再び渡露のため北京に滞在していた間、周作人が正々堂々と片上伸と接触していたこと

は注目される。何故なら、この時の片上伸は日本政府に「要注意人物」として監視され、取り調べまで受けていたからだ。[33] 実際に片上伸が周作人宅を訪ねた当夜、早速不審人物が周宅を襲っている（『周作人日記』二四年七月一日を参照）。それでも周作人は片上伸が滞在中の旅館を訪ねたり、友人を連れて宴会に出席したりしていたので、[34] 二人の信頼関係は相当強かったと思われる。そして片上伸もこうした交友関係を通じて、多くの中国人文学者と知り合ったようだ。その中で、少々繰り返し気味になるが、周作人の果したパイプ役は見逃すことが出来ない。二人の関係について、現在はまだ推測の部分が多く、十分な考察は殆ど出来ていない。今後周作人と片上伸の交換書簡などを調査しつつ、二人はどういう意見交換をしていたのかを探って見たい。この点に関する新資料の発掘は、周作人研究のみならず、日中文化人の交流史にも新しい一頁を与えるだろうと期待している。

ところで、これほど親密であった周作人と片上伸の関係ではあるが、『周作人日記』からも分かるように、一九二五年片上伸が第二次ロシア留学から帰国した後、突然連絡が途絶えた。一九二八年三月に片上伸が突然病死した際にも、周作人は一言も触れなかった。恰も何らかの原因で二人の友情がいきなり絶たれたようだ。この疑問に関する究明作業は今後の課題にしたい。

(三) 片上伸を想う人々

しかし周作人とは対照的に、周作人を通じて[35]片上伸を知ったと思われる人々が、片上伸の病死をそれぞれの形で言及し、記念していた。例えば陳望道は一九二八年一〇月五日に[36]、短篇「関于片上伸」を書き、次のように述べている。

日本的这时，正在重苦时代；然而不幸，他们的一个战士片上伸，却又正在这时病死了。……片上伸氏的文章，在我国仿佛不曾有人介绍过：读者或许对于他很生疏。……片上氏的死，是非常突然的。他的朋友，他的学生，都说梦中也不曾想到，他会死的这样的突然。……对于片上氏有人因他生前〝不曾投身〟〝不曾绝叫〟的缘故，在他死后还

鞭尸似地骂他不曾努力的情境，我总觉得片上氏是，不幸而生在日本，又不幸而死在日本了。几日来，不知什么缘故，总是纪念着他，于是将他已经收集在「文学和社会」和「文学评论」中的，及还散在各处未经收集的，他近年所作的各论文，约略再看了一遍。觉得有些地方实在是可供我们的参考。虽然抄书是苦工作，我又在我们的学校里担任很多，事务很杂，每日总是疲劳极了才得回来，也是不能不奋发起来抄录一些了。……写成大半的时候，忽然济南惨案发生了。关于日本的事情，除非是骂的，当然无人看；我也就因此不愿写下去。[37]

また半年後の雑誌『北新』（第三巻第五号、一九二九年）にも、「一九二八年的日本文藝界」という一篇の論文が掲載され、その中で、

这一年来日本底文艺批评界底不幸，便是片上伸底死去。无论如何，在近来日本文学界沉滞的时候，而失去这一个巨星，总不能说这不是日本文学界底损失。尤其是片上伸底批评，已经由叙说的说明的，一转而为提倡的主张的时候，却遽尔死去，更不能不说日本底文学界因片上伸底死而加上一层荒凉寂寞了。[38]

という一節の片上伸を哀悼する言葉がある。そして、周知のように魯迅も一九二八年から片上伸の文章を多く翻訳しはじめ、特に数年も前の北京講演を――すでに三ヶ所に掲載されているにも拘らず――改めて翻訳して、それを収集した『壁下訳叢』の「小引」に、「片上伸教授は死後に非難が多かった人だが、私はその主張が強固で熱烈なのが好きである」と特筆している。これらの「記念活動」によって、片上伸の名前は中国で広く知られるようになったようだ。例えば当時魯迅と親しかった韓侍桁と馮雪峰も片上伸の「生みの力」「都市社会と文学」[39]と『社会と文学』[40]を翻訳していたし、鄭振鐸も『文学大綱』[41]の中で、一気に五十人以上の明治期の日本文学者の名前を並べた後、特に片上伸の写真

だけを当頁の四分の一の紙面を使って掲載している。これほど多くの人々が片上伸の死を悼んだということは、決して単に知人の死を哀悼しただけのものとは言い切れないだろう。恐らく片上伸の文学的な将来にかなり大きな期待を掛けていたに違いない。その期待の正体が何であったのかについては、後に触れることにして、まず一つ強調しておきたいのは、この時期の片上伸の発言は、四・一二クーデターのショックに打ちひしがれていた中国人の若者に、かなりの激励を与えたようだ。例えば、当時の社会状況を背景にして創作した葉紹鈞の小説『倪煥之』に登場する挫折した主人公倪煥之は、酒に酔っ払った後次のように述べている。

这几天来差不多读熟了的日本文学评论家片上伸的几句话，这时候就像电流一般通过他的意识界：

现在世界人类都站在大的经验面前。面前或许就横着破坏和失败。而且那破坏和失败的痛苦之大，也许竟是我们的祖先也不曾经受过的那样大。但是我们所担心的却不在这苦痛，而在受了这大苦痛还是真心求真理的心。在我们的内心里怎样地燃烧着。

这是片上伸氏来到中国时在北京的演说辞，当时登在报上，焕之把它节录在笔记薄里。最近捡出来看，这一小节鼓励的话仿佛就是对他说的，因此他念着它，把它消化在肚里。(42)

また、先日の片上伸の来訪について日記に一語も触れなかった胡適も、この講演を聞いて、「他用易卜生代表斯堪狄那维亚，用托尔斯泰代表俄国，指出他们都趋向极端绝对的理想，不喜调和，为北欧文学的特色。此意亦有理。」(43)と高く評価している。もしこれらが講演そのものに対する一時的な感動に過ぎないとしたら、「尤其是片上伸底批评，已经由叙说的说明的，一转而为提倡的主张」という前に活用した『北新』誌による指摘は意味深い。前述のように、この時期の片上伸の「主張」は、つまるところ「プロレタリア文学の様式と内容」に関する「主張」である。特に片上伸が「〈説明〉的な叙説から「主張」へ発達した」と見抜いているところは鋭い。これはむしろ大宅壮一の非難よりも急所を

押さえていると言えよう。これほどの片上研究が進められている点から見ても、この時期に中国文壇を覆っていた片上伸の死を哀悼する動きは、決して単なる個人的な感情によるものとは片付けられない。この動きに、当時中国文壇のある種の「目的意識」が託されていたに違いないという感触を私は得ている。もう少し突っ込んで言えば、つまり片上伸の「プロレタリア文学の様式と内容」に関する議論に中国人が注目していた可能性が高いと思うのである。このことは一九二八年以後の「革命文学論争」の変化からも伺える。初期の革命文学論争は周知のように、文学は宣伝か否かというイデオロギー的な問題に関する議論が先行していたが、この時期から議論の焦点が次第に「形式」や「題材」など文学そのものに関する問題に収斂しつつあった。例えば林伯修の「一九二九年急待解決的几个关于文艺的问题」（一九二九年三月二三日）；干釜の「关于普罗文学之形式的话」（一九二九年五月）；漢年の「文艺通信——普罗文学题材问题」（一九二九年一〇月一五日）；銭杏邨の「中国新兴文学中的几个具体的问题」（一九三〇年一月一〇日）などの作品は、その題名からもこの傾向が窺えよう。これら文学の形式や内容に関する議論はまさに片上伸が晩年において必死に探究していた問題であった。彼の病死をきっかけに、中国で突然のように彼を記念する文章が浮上し、その論著が多く翻訳されるようになったのは、恐らくこの時期になってようやく片上伸のプロレタリア文学理論に追いついてきたのであろうと推測される。そうすると、最初に片上伸の死に言及した陳望道と最初に片上伸の「無産階級文学の諸問題」（一九二九年二月）を中国革命文学論壇に紹介した魯迅の意図も明白になってくる。片上伸の文章を読んで二人とも「その主張が強固で熱烈なのが好きである」と言った深意もここにあろう。パイプ役を果した周作人が片上伸を忘れていた時に、魯迅らが片上伸を思い出した格好は、まさに一九三〇年代中国文壇の変遷図を描いているようにも見える。特に数年前には、あまり片上伸に関心を持っていなかった魯迅が、革命文学論争を経て次第に片上伸の主張に共感を持つようになった経緯は興味深い。魯迅が「私はその主張が強固で熱烈なのが好きである」と述べたのも、こうした思想的な変化から生じてきた表現と思われる。その後、魯迅が片上伸の著作を買い求めて多くの翻訳をしたことは、既に知られていることで

ある。その受容関係について、先行研究を踏まえつつ、次節で検討したい。

(四) 魯迅と片上伸

魯迅と片上伸の関係を論じる際、必ずといっていいほど『壁下訳叢』の「小引」が引かれる。丸山昇も「魯迅と〈宣言一つ〉」の中で、この「小引」から次の一節を引用しつつ、こう書いている。

> 片上伸教授は死後に非難が多かった人だが、私はその主張が強固で熱烈なのが好きである。ここに有島武郎との論争を少し入れておいた。もとの階級を固守するものと反対のものと両派の意見の所在を見ることができよう……中略……これはちょっと見ると、魯迅は片上を支持しているようにとれる文章だが、果しそうとって好いかどうか、私は疑問に思う。……魯迅はこの少し前まで〈革命文学〉派から、プチ・プルの殻を脱ぎすてようとしない文学者として激しく攻撃されていたこと一つを考えてみても、魯迅がこういう言葉に有島批判を含ませるという様な言い方をするとは考えられない。また何よりも、この時期までの魯迅の立場と〈宣言一つ〉を、単に悪い意味で〈もとの階級を固守するもの〉ととったとは考えられない。[44]」

このように丸山は安易な理解は危険であることを示した。更に魯迅の「今日の新文学の概観」から「ある階級から他の階級へ移るのは、もちろんあり得ることです。しかし最も好いのは、意識がどんなものか、すっかりありのままに話して、大勢の人に見てもらい、敵か味方かはっきりさせることです。頭の中には旧いかすをたくさん残しているのに、わざとごまかして芝居のように自分の鼻を指して、〈我こそは無産階級だ〉などといってはいけません。[45]」という一節を引用して、当時魯迅の立場は有島の「何しろ私は私の実情から出発する」という主張に近いと立証し、魯迅は有島の「〈宣言一つ〉を堺、片上らとは全く異質の発想においてとらえたのだ[46]」と述べている。

これに対して、中井政喜は「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」（前掲注①参照）の中で、次のような異議を提出している。

①有島・武者小路によって提起された問題（「やや古い論拠」）は、むしろ片上・青野のプロレタリア文学論によって、継承され、或いは否定され、或いは発展させられている、と一九二九年の段階で魯迅は捉えていたのではないか、と予想させる。」　（当該紀要 p.85）

②只魯迅は、一九二八年以来始まった革命文学論争の経過を通じて、マルクス主義文藝論と本格的に接触して行くことを通じて、この連帯の課題に対しての認識を、有島の自己限定から脱却して前進させて行きつつあったのではないだろうか。……自己限定的連帯に固執した有島に対する、「本来の階級を固守するもの」という一九二九年の段階での「小引」の評価が有り得た、と思われる。　（同 p.96）

両者からの引用がかなり長くなったが、論点を纏めておくと、つまり「宣言一つ」に関する論争を紹介した魯迅は、本来の階級を固守する有島武郎と、知識人として無産階級文学の運動に関わって行くべしと主張する片上伸の立場と、どちらを支持したのか、という問題である。丸山昇は、魯迅は有島の見解に理解を示しているし、しかもそれから多くのエネルギーを得たと主張しているが、中井政喜は有島と片上伸の見解は基本的には一つの発展方向の延長線であり、一九二八年以後の魯迅は寧ろ片上伸の主張に賛同していた或いは晩年マルクス主義の受容によって賛同するようになったと主張している。そして数年後、この議論に新たな視点から加わったのは長堀祐造の論文「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文藝理論」[47]である。この論文で氏は主に魯迅とトロツキーの受容関係を検討している。その中でも最後の一節で行われている「魯迅に於ける同伴者作家の意味」に関する考察は大変印象深い。それは、本人は意識していたか否

かはともかく、長堀が提示した「同伴者魯迅」像は、まさしく丸山と中井両氏の、有島か片上かという聊か二項対立的な議論によって発生した断絶空間を上手く埋めていたためだ。もし私の理解が大きく間違っていなければ、この一節における長堀見解とは、つまり「自らが骨の髄まで知識人たることを認識していた魯迅」は、有島の階級移行否定論に同感しながらも、「帝国主義諸国による侵略の前に国家存亡の危機に直面していた中国の状況下にあっては、階級移行の問題を論ずる以前に、知識階級にありながらも戦わねばならぬ切迫した要求があった」ため、「同伴者」として革命に加わっていく立場を取っていた、ということになるだろう。つまり魯迅は「有島理論」も「片上理論」も受け入れ可能だった、[48]ということになる。

私は、丸山昇の魯迅が有島からエネルギーを受容したという観点に同意する一方、魯迅が片上伸文章を翻訳した意図に関しては、中井政喜の見解に似たような意見を持っている。しかし魯迅が『壁下訳叢』の後半で片上伸の文章を翻訳した意図を、中井分析だけで片づけるのは不充分であると感じる。

実は、私は片上伸と魯迅の関係を考察する際、丸山・中井両氏ともあまりに「宣言一つ」にとられすぎているという印象を受けている。より広い視野で、つまり片上伸のこの時期のその他の作品をも視野に入れて考えてみれば、魯迅の翻訳意図は両氏が議論していること以上の広がりを持っていたと思われるのである。ここで、前述の『文学評論』の主旨を思い出したい。この時期の片上伸は「プロレタリア文学の様式と内容」が如何に建設されるべきか、という問題を熱心に考え、繰り返しその重要性を強調していた。私は魯迅が『壁下訳叢』の後半で片上伸の論文を翻訳した意図はここにあったのではないかと思うのである。[49]魯迅がこれらの文章を翻訳していた当時は、ちょうど革命文学論争が次第に文学そのものに関する話題に回帰しつつある時期にあったし、実際に魯迅が片上伸の論文「無産階級文学の諸問題」（前出）を訳した後、中国の左翼文壇でも「様式」と「内容」に関する議論が次第に注目されるようになり、これに関心を示す人もかなりいたようだ。例えば「死せる阿Q時代」を書いた錢杏邨さえもこの問題に関心を寄せて、[50]議論に加わっ

ていた。彼らの文章が片上伸に時々言及していることからも、この議論は片上伸の文藝批評と関係していることが推測できる。魯迅の翻訳意図も片上伸のこれらの議論を中国に紹介しようとした点にあったのだろう。更に一九三二年に、片上伸の弟子でもあった上田進がソヴェート文壇から「社会主義リアリズム」的な創作法を日本プロレタリア文学界に紹介した時、[51]魯迅が素早くそれを中国に紹介した事実もその意図を露にしている。そして魯迅に続いて王笛（馮厚生）、[52]楼適夷、[53]周揚[54]らも上田進の関係論文を翻訳或いは紹介したのは、上田進の文藝活動が実は片上伸が生前に模索していたプロレタリア文学の発展方向と一致していたからであろう。このことはその反面、当時魯迅らロシア語に不慣れな知識人達が片上伸が率いていた早稲田露文科グループの翻訳・紹介活動に非常に注目し、強い関心を寄せていたことを証明している。これは従前あまり注目されてこなかった研究領域である。早稲田露文科グループの翻訳・紹介活動は中国プロレタリア文学界にどのような影響をもたらしていたのか、筆者はそうした受容関係の解明を今後の研究課題としていく計画である。そしてこの受容史を一つの手がかりとして、日中両国の左翼系文学の受容系譜を作成したいと考えている。

注

（1）丸山昇と中井政喜が片上伸と魯迅について数本の論文を著しているが、魯迅との関係以外については殆ど触れてない。本論の後半では両氏の「魯迅と〈宣言一つ〉」（『中国文学研究』一号、一九六一年四月）と「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」（『大分大学経済論集』、三三（四）、一九八一年）「ブロック・片上伸と一九二六年～一九二九年頃の魯迅についてのノート」（『大分大学経済論集』、一九八五年、三六〈五・六〉上・下）を先行研究として取り上げたい。

（2）中学校から漢詩を作っていたことと、当時使われていたペンネーム（例えば李白を思い起こさせる〈白仙〉）を見ると、漢学者であった伯父の影響が推察できる。

（3）片上伸の伝記に関しては、主に下記の文献資料を参考した。

『大正期の文芸評論』（谷沢永一著、塙書房、昭和三七年）；『早稲田大学百年史』（早稲田大学出版部、一九七八～一九九七）；『近代文学研究叢書』（昭和女子大学近代文学研究室編）第二八巻；『明治文学全集四三』（筑摩書房、一九六七）；『片上伸文集・解説』（津田孝編、新日本出版社、一九九〇年）。

（4）『片上伸全集』（砂子屋書房、一九三八年）第一巻の「編輯者の序」（谷崎精二）を参照。

（5）昭和一三年五月号の『早稲田文学』の特集「片上伸先生の追悼記」を参照。

（6）『宮本顕治文芸評論選集』（新日本出版社　一九八〇年）第二巻を参照。p.33。

（7）『片上伸全集』（前出）の「編輯者の序」において、谷崎精二氏は片上伸の一生を三期に分けている。また松澤信裕のように、「自然主義文学擁護時代を第一期、自然主義に内在する彼自身の主観的・理想主義的傾向が強まり、生命論的・藝術至上主義的時代といわれる時期を第二期、ついで一九一五（大四）年のロシア留学前後の、人道主義的傾向を示した時期を第三期、ロシア革命を見聞して帰国し、早大露文科新設に参画して、その主任教授となる一方、「中間階級の文学」を発表して、文学の社会性・階級性を主張する唯物史観の立場に立った時期を第四期」（『民主文学』一九九〇年二、二九九期、「片上伸論」）とする研究者もいる。本論では、説明上の便宜を考えて二期に分けたい。

（8）大宅壮一著「片上伸論」を参照。初出は雑誌『新潮』一九二八年五月号に所載。後『大宅壮一全集』（昭和五六年五月　蒼洋社発行　英潮社発売）第一巻に所収。p.311。本稿における大宅壮一作品の引用は全て同全集に準ずる。仮名遣いも同全集に統一する。

（9）『吉田精一全集』第六巻「片上伸Ⅱ」を参照。　p.697。

（10）同注（9）。

（11）『片上伸全集』第二巻。「文学運動の過程について」P.8～9。

（12）『片上伸全集』第二巻。「第三階級勃興当時の文学様式」p.10

（13）「ロシア無産階級文学の発達」より引用。『社会問題講座11』（一九二七年、大宅壮一編、新潮社）所収。p.17。

（14）「最近ロシア文学の意義」より引用。後に『文藝評論』に所収。　p.1～2

（15）同注（14）。　p.28

（16）同注（11）。　p.18

(17) 同注（11）。　p.13～15。

(18) 同注（11）。　p.11。

(19) 早稲田大学の露文科自体が片上伸によって設立されたことに、また彼がその主任教授を勤めていたことから、片上伸の学生に対する影響は相当強かったと思われる。後に露文科生の大半が「左傾」したことも、この日本プロレタリア文学理論の発達に大きな功績を残した先生と無関係ではないだろう。『日本の近代文藝と早稲田大学』（昭三二、一〇　理想社）には、片上伸が亡くなった後は、主に岡沢秀虎、中山省三郎、小宮山明敏、上田進など露西亜文学の専門家が出たと記されている。その中で、特に岡沢秀虎と上田進が引き続いてこの「プロレタリア文学の様式と内容」の問題について考えていたようだ。

(20) 例えば『近代日本文学史論』（昭和三三年四月　成瀬正勝・吉田精一監修　矢島書房）には、「このころソヴィエト聯邦においては、従来のプロレタリア・リアリズムや唯物弁証法に対する批判が、マルクスおよびエンゲルスの生前の文学・芸術に関する諸論文の研究と共に強まり、その克服を社会主義リアリズムのスローガンに求めるに至っていた。それが『社会主義的リアリズムの問題』（昭八・外村史郎訳）などにおいて紹介されると、ほどなく、徳永・宮本百合子・森山啓・中野・久保栄らのあいだに論争をまきおこした。」と記している。また山田清三郎も『プロレタリア文学史　下』（一九五四年九月　理論社）において、「社会主義的リアリズムの問題」は一九三三年二月に、上田進の紹介によって「ナルプ内外の注意をよびおこした」と述べているし（p.365を参照）、これが数ヶ月後の同年六月に、外村史郎の全面的な紹介によってナルプの方針転換に繋がったと述べている（p.383を参照）。

(21) 芦田肇著「中国左翼文藝理論における翻訳・引用文献目録」（一九二八～一九三三）の「まえがき」から引用。東洋学文献センター叢刊　第二九輯　昭和五三年三月。p.4。

(22) 『北京週報』一九二二年九月二一日号。p.32。読点は原文を尊重。

(23) 『北京週報』一九二二年九月二八日号。p.32。句読点は原文を尊重。

(24) 片上伸自身は北京に来る前に、上海・武漢などにも講演をしたことがあると述べている（『北京週報』所載の「北欧文学の原理」による）。上海・武漢など各地の新聞はまだ調査していないので、はっきり「最初」のものと断言することはできない。

(25) 魯迅訳「北欧文学的原理」には「這是六年前，片上先生赴俄國遊學，路過北京，在北京大學所講的一場演講；當時譯者也曾往聽」と記している。『魯迅全集』（一九四六年版）第一六巻　p.204を参照。

(26)『北京週報』一九二二年九月二一日号。p.52。

(27)『早稲田大学百年史』を参照。

(28)『周作人日記』(大象出版社、一九九六年一二月、影印本、以下同)の一九二二年九月一八日を参照。

(29)『周作人日記』の一九二二年九月一七日を参照。

(30)一九二〇年五月一九日、李大釗らが主導した北京大学訪日団が早稲田大学を訪問した時、片上伸がその歓迎会で演説をしている。片上伸と北京大学教授陣との交流関係が早くから親密であったようである。(『晨報』一九二〇年六月十五日を参照。)なお、片上演説の内容について、同報は以下のように紹介している。「次片上伸教授演説以水爲喻謂中日国民猶之水冷則結氷然其下仍為水今中日兩国其上面雖結氷、而下面仍有活水云。」

(31)『胡適日記』(安徽教育出版社、二〇〇一年一二月)の一九二二年九月二〇日を参照。

(32)『周作人日記』に片上伸の名前は二〇回以上も現れている。その交友ぶりを示すため、片上伸の名前が出てくるところを下に写しておく。名前の下に傍線を附し、日付変更の前に「*」で切り分ける。

*一九二二年九月一七日阴冷。晨五七度。上午往适之处候片上君、久持及贺二人同来午返。

*一九二二年九月一八日晴。上午赴燕大教员会。午至北大访守常。在新潮社逗留。下午五时又至燕大访地山。六时行开学礼。八时半返。丸山片上二君来访不值。得乔风函。信纸五札。

*一九二二年九月一九日晴。上午寄乔风函。访举士远。下午至燕大、又至扶桑馆访片上君、贈以译书三部。傍晚返得玄同函。

*一九二二年九月二〇日晴。上午寄季弗玄同函。往北大收五月份金。往扶桑馆访片上君、同至第三远讲演、为口译。又至孔德学校听讲。七时共往东华饭店会餐、主客十四人、九时散。送片上君雪朝诗诗年(送)及爱罗童话集五本。

*一九二二年九月二八日晴。风。上午五八度。下午往燕大至日邮局寄「实业之日本」社金十九元半。片上君书两包。在东亚公司买书一本、四时返、得魏金枝君函件。

*一九二二年一〇月一六日晴。上午往北大、下午往燕大。四时索君来访。晚得片上君书一册、由出版元寄贈。李开先君来、得省三函。

*一九二二年一一月六日晴。上午往北大、下午至日邮局为爱罗君寄信。又尾崎君金三十元。下午往燕大、得片上丸山乔风函。寄景深函。

＊一九二二年一一月一六日阴。上午往女高师、午至商务取三十元。下午往燕大、得片上君寄书二本。聚英阁寄芭蕉翁传、一本小雪。寄雁冰函件。

＊一九二四年七月八日阴雨、下午大雷雨。上午在家、下午在东亚公司买书二本。至川田医院访丸山君。又往中央饭店访片上君。

＊一九二四年七月一一日晴。上午访片上君、同到北大二院访蒋君。处至禄米仓。午同凤举在德（冈）饭店吃饭。下午返。片上君来访。夜十二时贼来窥北窗遂去之。小雨。

＊一九二四年七月一二日大雨终日、前院积水寸于、傍晚霁。上午闷坐家中。下午凤举宴片上君。外适之兼士幼渔及巽伯乔共八人。

＊一九二四年七月一七日阴、下午晴。上午往北大代取十二月份薪一部分、又买书一本。下午往什方院找凤举至东亚公司买书两册、又往中央饭店赴片上君约。有山川早水君同坐。以日本小说集一本赠片上君、十一时抵家一时始睡。

＊一九二四年七月一八日晴。上午同丰一往五一公司买物至北京饭店、买书三本又至邮局取丸善小包、内书一本。午返。下午八时同凤举至东车站送片上君至行、遇大雨一阵、九时回家。

＊一九二四年七月二六日雨。上午得片上君函、下午院中水又涨。寄乔风函。

＊一九二四年九月一日晴。上午往北京饭店买书二本、至邮局取丸善寄书二本午返。下午浴。寄士远函、得片上君片。

＊一九二四年一一月二〇日晴。上午往女师大、下午往燕大、晚招矛（尘）斐君共吃火锅。收北大二月份之三成。寄乔风函、孟和语丝一份。得片上君函。

＊一九二五年一月七日晴。上午在家阅学生译文、下午往燕大。得片上君片。

＊一九二五年二月一六日晴、夜大风。上午往北大午返。下午作小文。张操来不见、与信子谈少倾去、晚伏园来。得木天函、片上叶书（はがき）。

＊一九二五年二月二五日晴。上午在家下午往燕大陶样来、得乔风函寄复函。又寄朱子沅湘函。片上はがき转递。

＊一九二五年二月二六日晴。上午往女师大借五月份薪。至邮局寄丰狂堂五元。取丸善寄书一册。下午往燕大又赴中文辩论会、七时回家伏园来得朱子沅马孝安函。寄片上函。

＊一九二五年五月一一日晴。上午往北大下午往华北往医院。四时至研究所开会。七时得回家。得片上君函。

＊一九二五年六月二六日晴。上午往师大收一个月另三成薪。寄实业之日本社金九元。日本文学丛书刊行会六元。在北京饭店买

书三本。下午伏园来饭后去。寄片上函。

(33) 外交史資料館公開資料『過激派其他危険主義者取締関係雑件　本邦人ノ部　十六』を参照。

(34) 『周作人日記』一九二四年七月一二日を参照。

(35) 陳望道は「関於片上伸」(『陳望道文集』(上海人民出版社　一九七九、一〇～一九九〇)第一巻所収。p.472～477°)の中で、「大约他在我们民国十一年的九月间，是曾到过北京，并且曾在北京大学演讲过的。那时住在北京的，或者知道他。」と述べているから、周作人の招きで片上伸が北京大学で行った講演会に陳望道もいたと思われる。勿論周作人が主催したその宴会にも出席した可能性が考えられる。葉紹均も「文学研究会」のメンバーであったし、周作人とも関係が深かったので、この講演会にも出たと思われる。特に陳望道と葉紹均の引用文は魯迅・川島の訳と違うので、恐らく自分自ら現場で聞いたと思われる。

(36) 片上伸は三月五日に病死しているので、陳望道の文章も「五日」に発表されているところが興味深い。わざとその日に合わせたとしたら、陳望道はかなり片上伸の死を悼んでいたと思われる。

(37) 陳望道著「関於片上伸」(注35同)を参照。

(38) 雑誌『北新』第三巻第五号掲載。楊憂天著「一九二八年の日本文藝界」を参照。p.55～56°。著者楊憂天については不明。

(39) 韓侍桁訳「都會生活与現代文学」。(北新出版社二―二〇　一九二八年八月二〇日)

(40) 馮雪峰訳の『社会和文学』(上海光華出版社、一九四五年以前版)は『中国訳日本書総合目録』(一九八〇年　香港中文大学出版社)を参照。

(41) 鄭振鐸著『文学大綱』第四冊(大学叢書、〝長沙〟商務印書館、一九三九年)　p.641°

(42) 葉紹鈞著『倪煥之』(人民文学出版社、一九六二年)を参照。p.299°

(43) 『胡適日記』(安徽教育出版社　二〇〇一)第三巻。p.803を参照。

(44) 丸山昇「魯迅と〈宣言一つ〉」(前出)。　p.19～20°

(45) 『魯迅全集』第四巻(人民文学、一九八一)　p.136°

(46) 丸山昇「魯迅と〈宣言一つ〉」(前出)。　p.21°

(47) 長堀祐造「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文藝理論」(『日本中国学會報』第四〇集一九八八年　p.p.199～214)を参照。本稿に於ける氏からの引用は、とくにことわりがない場合はすべてこの論文による。主にp.210下段を参照。

(48) 長堀祐造は論文「一九二八～三二年における魯迅のトロツキー観と革命文学論」(『慶應義塾大学日吉紀要』NO15 一九九五年六月 p.85～100) において、魯迅は一九二八年頃からトロツキー理論からルナチャルスキー理論に近づいていた、ということをも示唆している。つまりプロレタリア階級文学を認めないトロツキー理論から、それを認める方向に行くときにルナチャルスキー理論が助けたのではないか、という推論である。魯迅の有島理論と片上理論の「受け入れ可能」に、その態度の「転換」や「変遷」も見られる、ということである。

(49) 例えば魯迅に訳された「階級藝術の問題」にも、「俄国文学所取之路凡二。其一，是摂取人生的种种方面。……多角底作为題材。又其一，是新的形式的创造。……仍取以使之活現于更其全部底情绪之上，再現为更其特殊的综合底之形。」とあり、やはり無産階級文学の形式や題材を議論していることが分かる。

(50) 魯迅訳が掲載された後、一九三〇年一月（執筆は一九二九年一二月）に銭杏村が長い文章「中国新興文学中的幾固具体的問題」を書き、熱心に「形式」や「題材」の問題を議論している。

(51) 魯迅と上田進については、拙論「魯迅と上田進」(『東方学』一〇七輯) を参照。

(52) 王笛訳「苏联文学的展望」(『文学雑誌』一巻三・四期)。原著は上田進の「ソヴェート文学の近況」(『プロレタリア文学』、一九三三年二月号)。

(53) 楼適夷訳「偉大的第十五週年文学」(『文学月報』一―五、六合刊、一九三二年一二月)。原文上田進の「拾五周年をむかへるソヴェート文学」は『プロレタリア文学』(一―一三　一九三二年一一月) に掲載。

(54) 周揚の「关于『社会主义的现实主义与革命的浪漫主义』――『唯物辯证法的创作方法之否定』」(『現代』四巻一期、一九三三年一一月) には、上田進の論文が言及されている。